SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

蔣渭水「臨床講義」の今日的意義：20世紀前半の台湾文化協会と民族運動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部アジア研究センター 公開日: 2022-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028670

蔣渭水「臨床講義」の今日的意義

―20世紀前半の台湾文化協会と民族運動―

岩　井　　淳

以下に掲載するのは、2021年11月30日に台北の国家図書館・国際会議室で開催された「台湾夢2049―超現代臨床講義」と題されたシンポジウムでの岩井報告「20世紀前半の台湾文化協会と民族運動――蔣渭水「臨床講義」の今日的意義」の講演録である。このシンポジウムは、1921年11月30日に蔣渭水が「臨床講義」を発表してから、ちょうど100年を迎えるにあたって挙行された。私以外には、国立台湾大学の廖咸浩教授と国立政治大学の陳芳明教授が講演者であった。廖教授と陳教授が直接会場で講演したのに対して、私は、コロナ禍のために台湾に向かうことができず、オンラインでの参加となった。

当日は、私が作成した18分ほどの日本語動画を、中国語の翻訳字幕付きで上映し、その後、オンラインで質疑応答の時間が設けられた。私の日本語動画を短い間に中国語に翻訳してくれたのは、蔣智揚さんである。蔣智揚さんを初め、今回のシンポジウムでお世話になった台北の皆さんには、心より御礼申し上げたい。なお、本稿のタイトルは、シンポジウムのタイトルに比べて主題と副題を入れ替えている。シンポジウムの主題は、主催者から与えられたものであった。しかし、すでに静岡大学『アジア研究』13号（2018年３月）に同名の「20世紀前半の台湾文化協会と民族運動」という論文を発表していたので、それと区別するため本稿では主題と副題を入れ替えた次第である。内容的には、『アジア研究』13号に発表した論文のエッセンスをまとめ、特に「臨床講義」の現代的意義について触れている。

１．「臨床講義」再読――「世界文化に於ける低能児」？

台湾の皆さん、蔣渭水の「臨床講義」が発表されてから百周年を記念する集まりにお招きいただき、ありがとうございます。私は、日本の静岡大学に勤める岩井淳と申します。これまで私は何回か台北を訪れ、2017年３月に蔣渭水のお孫さんである蔣智揚さん、蔣朝根さんと知り合いになり、たくさんの資料をいただきながら、蔣渭水研究を続けてきました。本日は、「20世紀前半の台湾文化協会と民族運動」というタイトルで私の研究のエッセンスをお話しすると同時に、蔣渭水の「臨床講義」の今日的意義についても触れたいと思います。コロナ禍が収まった折には、再び台北を訪れ、本日、知り合った皆様方と再会し、議論する日を心待ちにしております。

今を去ること百年前、蔣渭水（1890～1931年）は、独自の方法と思考によって台湾の民族運動を指導しました。医師であった彼は、日本の統治下にある台湾で議会設置請願運動などによって民族運動を推し進めました。彼は1920年代に台湾文化協会や台湾民衆党の結成などを主導しましたが、1931年８月５日、腸チフスのため40歳の若さで世を去りました。

その彼が、「臨床講義」（1921年）なる文書において、台湾を患者に見たて、「診断・世界文化に於ける低能児、原因・智識の栄養不良」[1]と述べたことは、日本ではあまり知られていません。1921年10月に台湾文化協会は発足しますが、「臨床講義」は、その翌月の『会報』第１号に掲載されます。政治運動が大幅に制約される当時の台湾にあって、文化運動の形をとって啓蒙活動を始めた台湾文化協会で、蔣渭水は専務理事を務めました。台湾の民族運動を熱心に指導した彼は、なぜ故郷を「世界文化に於ける低能児」とまで呼んだのでしょうか。通常、人は自分の故郷に敬意を払い、多くの場合、尊重するものです。

[1] 蔣渭水「臨床講義」『台湾文化協会会報』第１号（1921年11月30日）。

しかるに、蔣渭水は、なぜ台湾を、そこまでひどい言葉を使って罵ったのか。その前提には何があり、「低能児」は何を意味し、そこから脱出する方法は示されたのでしょうか。「低能児」という蔑称から、次々に疑問がわき出てきます。この報告の目的は、そうした一連の疑問に向き合い、それらを解決することにあります。

これまで日本では、蔣渭水研究は、あまりなされてきませんでした。その一因として、台湾を中国の一部とする見方が強く、台湾の自治や自立に関心を寄せる研究が少なかったことが考えられます。しかし、近年、台湾の政治的・経済的自立化が始まり、それとともに蔣渭水の思想と運動を再評価する機運が高まっています。その中でも、蔣渭水の思想を「臨床講義」との関連で解明したものは、まだ少ないと思います。本報告は、蔣の思想の核心部に台湾を人体に喩える有機体的な思考があると考えます。台湾を人体に喩えるのは、医師である蔣渭水にとって、それほど違和感のない発想かもしれません。

有機体的な思考は、国家や社会を人間とのアナロジーによって描き、人々が人体の器官のように様々な役割分担をもって国家に参画することを説きます。国家が有機体である以上、それを構成する人々は、緊密な協力関係を取り結び、一体となって「生ける国家」を支えることになります。この国家観は、主権国家の成立期に普及し、近世（16〜17世紀）を中心にイングランドやスコットランド、フランス、東欧などで発達しました[2]。それはまた、国民国家成立期にあたる19世紀のドイツや日本に受け継がれ、全体に対する個の奉仕を強調する思想として、特異な発展を遂げます。有機体的な思考は、大きく区分すると、第一に国王中心の有機体的国家観、第二に「健全な」国家と「モンスター」の対立を説く社会観、第三に政治的・経済的成長を目指す社会観という三つに分類できます[3]。

以下、本報告は、第一に、蔣渭水の「世界文化に於ける低能児」の意味を「臨床講義」の中に探り、第二に、蔣渭水と台湾文化協会の活動を追うことによって、「低能児」から脱却する道が模索されたことを指摘します。最後に、蔣渭水の台湾観が有機体的思考の中で、どのように位置づけられ、今日、どのような意義を持っているのかを検討します。

2．植民地台湾と「臨床講義」――「世界文化に於ける低能児」の意味

日本による台湾支配の端緒は、1894年に始まります。同年８月、日清戦争が起き、清朝は日本に敗れ、1895年４月の下関条約によって、台湾は日本に割譲されます。日本政府は、1895年５月、海軍大将の樺山資紀を台湾総督に任命し、すぐに軍隊を派遣します。こうした日本軍の制圧によって、台湾民主国は崩壊し、1895年11月には台湾全島の「平定」が日本本土に向けて報告されました[4]。台北は、日本支配の拠点となり、急速に近代都市の装いを整えます。そこには最新の建築が立ち並び、鉄道も敷設されました。台北は、1920年に正式に市制を敷き、台北市となりました。その頃から、台湾の知識人たちは、自治を求める運動を開始します。蔣渭水も、その一人でした。

1890年８月６日に台湾北東部の宜蘭で生まれた蔣渭水は、６年制の教育課程を２年間学んだ後、1910年に台北の台湾総督府医学校（現在の台湾大学医学部）に進学します。医学校を卒業すると、彼は宜蘭病院の内科に勤めますが、一年も経たないうちに宜蘭病院を辞め、台北に出ます。1916年に台北西部の大稲埕で大安医院を開きますが、彼の活動は医業にとどまることなく、各界の名士と知り合い、やがて政治の世界に踏み出します[5]。彼は、1914年の台湾同化会運動の指導経験をもつ林献堂とも知り合い、台

---

[2] ヨーロッパ中近世の有機体的国家観については，R. H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism* (Harmondsworth: Penguin Books, 1938), pp. 27-48〔トーニー著、出口勇蔵・越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆』上，岩波文庫，1956年，42-75頁〕を参照。トーニーは，「社会有機体」という節を設け，有機体的国家観を概観している。

[3] 本報告は、岩井淳「「生ける国家」と「モンスター」」『歴史学研究』938号、2015年を前提にし、そこで論じきれなかった20世紀の有機体的社会観を取り上げたものである。

[4] 伊藤潔『台湾』中公新書、1993年、71-76頁。

[5] 吉田荘人「民族運動とアヘン問題――台湾民衆党の創設者、蔣渭水」同著『人物で見る台湾百年史』東方書店、1993

湾議会設置請願運動などを通じて、台湾の自治を推し進めようとしました。この運動と密接に関連したのが、林献堂を総理とし、蔣渭水と蔡培火を専務理事として発足した台湾文化協会です。

台湾文化協会は、1921年に設立されます。その『会報』第１号に、蔣渭水は「臨床講義」(1921年）を発表します[6]。これは台湾を患者に見たてた冷徹な自己否定の書です。この文書は、以下のように、カルテに倣った形式をとり、漢文調の日本語で書かれています。まずは、この文書を検討し、そこに出てくる「世界文化に於ける低能児」の意味を考えてみましょう（一部表記を改め、句読点を付しました。以下同様です)。

臨床講義

台湾と云ふ患者に就て
一、姓　名　台湾島
一、性　　男
一、年　齢　現住所に移転してより二十七才
一、原　籍　○○○○○○○○○○[7]
一、現住所　大日本帝国台湾総督府
一、番　地　東経一二〇～一二二、北緯二二～二五
一、職　業　世界平和第一関門の守衛
一、遺　伝　黄帝、周公、孔子、孟子等の血統を受けたる遺伝性著し
一、素　質　前記の如き聖賢の後裔なる故、素質強健、天資聡明
一、既往症　幼少の時、即ち鄭成功の時代には身体すこぶる強壮にして、頭脳明晰、意志堅実、品性高尚、動作快活であったが、清朝時代に入ってより政策中毒のため、漸次身体衰弱し、意志薄弱となり、品性卑劣、節操低下した。日本帝国に転居して以来、不完全なる対症療法を受けて、稍稍[8]恢復に向ったが、何分二百年の長きに亘る慢性中毒症なる故、容易に治癒の見込立たず。
一、現　症　道徳廃頽、人心澆漓[9]、物質的欲望に富み、精神的生活に乏し、風俗醜陋、迷信深く、頑迷不抜、衛生思想全く欠乏し、智慮浅く、永久の大計を立つることを知らず、ひたすら眼前の小利を争ふ、堕落怠惰、腐敗、卑屈、怠慢、虚栄、破廉恥、四肢倦怠、惰気満満、意気消沈にして全く生気なし。
一、主　訴　頭痛、眩暈、腹内飢餓感

まずこの様な患者であるが、これを診断するに、頭部は身体の割合に大きくて、思考力大なるべきはずなるも、二三の常識的質問を試みれば、その返答は不得要領である。して見ると、この患者は愚かで、低能児であることが想像される。これは頭骨が大きい代りに未だ内容空虚にして脳髄充実せないからである。それ故に、少し難しい哲学なり、数学なり、科学なり又は世界の大勢論を聞くと眼眩して頭痛する。

それから手と足が大へん大きく太く発達している。これは過度に労働したためであろう。次ぎに腹部を視診するに、腹胴は細く凹んでいる。腹壁は皺だらけで、あたかも経産婦の如く、白線を有す。これは大正五年来の欧州大戦の一時的僥倖によって、一時とみに腹を肥やしたが、昨年夏より講和風を引いて腸感冒を起し、大へんな下痢を催したため、極度に張りつまった腹壁が急に縮んだのであると想像さ

年、48頁。
[6] 蔣渭水「臨床講義」『台湾文化協会会報』第１号（1921年11月30日)。「臨床講義」は、蔣朝根編『蔣渭水先生全集』台北、2014年、384-387頁にも収録されているが、原史料と何箇所か微妙に食い違っているので、本稿では原史料に依拠した。
[7] 伏せ字になっているが、「中華民国福建省台湾島」が本来の記載である。
[8] しょうしょう、ようやくの意味。
[9] ぎょうり、人情が薄くなること。

れる。

一、診　断　世界文化に於ける低能児

一、原　因　智識の栄養不良

一、経　過　慢性病なる故、経過長し

一、予　後　素質純良なる故、適当なる療法を施せば、速かに治療すべし。これに反し療法を誤り、又は荏苒[10]遷延することあれば、病膏肓に入り、死亡するところあり。

一、療　法　原因療法、即ち根治療法

処　　方

正規学校教育　　極　量[11]

補 習 教 育　　極　量

幼　稚　園　　極　量

図　書　館　　極　量

読　報　社[12]　極　量

右合剤調和し、速用すること二十年にして全治すべし。

その他、効くべき薬品あるも、これを略す。

大正十年十一月三十日

主治医師　蔣　渭水

蔣渭水の論じた「臨床講義」は、台湾を単純に「世界文化に於ける低能児」と断罪したものではありません。むしろ、処方箋に従って、極量を服薬することによって、病状は十分に回復することが示されました。その方法は、「処方」にあるように、「正規学校教育」や「補習教育」を台湾の人々に適切に授け、幼稚園や図書館、新聞雑誌閲覧所を各地に設立して、「智識の栄養不良」を克服することでした。こうした「療法」や「処方」こそ、病気回復のために蔣渭水や台湾文化協会が実践したものでした。

3．蔣渭水と台湾文化協会の自治思想――「低能児」からの脱却

1921年10月17日、台湾文化協会は台北市大稲埕で設立されます。そこには、1032人の会員の内、300人が集まり、総理や専務理事が選出されます。当日の会合の冒頭で、蔣渭水が「先づ創立過程を報告」しており、この報告は、「文化協会創立経過報告」として11月30日の『文化協会会報』に収録されます。彼は、台湾文化協会の活動方針を10項目に渡って述べます[13]。それは「臨床講義」の「療法」や「処方」を具体的に展開したものでした。

この活動方針は、「臨床講義」の「処方」の部分とほぼ同じ内容で、それを詳しく述べたものと言ってよいです。運動方針は、方針にとどまらず、具体的に実践されます。この文書を載せた『会報』第１号は、1200部印刷され、そこには「臨床講義」も掲載されました。

読報社は台湾全土に設けられ、1922年１月18日までに８ヶ所、23年８月までに４ヶ所、24年６月までに１ヶ所と新設されます。それ以外では、活動方針にあるような社会教育の場が、各種講習会という形で展開されます。それらは、中止や解散を命じられながらも、粘り強く開催されます。映画の上映会や劇団による新劇の上演も、繰り返されました。さらに見逃せないのは、10項目の最後にある「各種講演会」です。講演会は、1923年から26年までの四年間に限っても、約800回を数え、台湾各地で、延べ30万

[10] じんぜん、無為に時が過ぎること。
[11] 規定された医薬品の最大限の用量の意味。
[12] 新聞雑誌閲覧所を意味する。
[13] 蔣渭水「文化協会創立経過報告」『台湾文化協会会報』第１号（1921年11月30日）、蔣朝根編『蔣渭水先生全集』、375頁。

人を越える聴衆を集めました[14]。講演会や講習会の話者となったのは、蔣渭水を初めとする文化協会の会員でしたが、その中には日本留学の経験をもつ者や日本留学から一時帰台した者が含まれていました。

ここで注目されるのは、活動方針にあった「漢文研究所の設立」です。すでに読報社の活動でも述べたように、日本語の新聞雑誌だけでなく、中国語の新聞雑誌が積極的に読まれていました。この点は、言語に限らず、文化や政治にも関連します。台湾文化協会が目指したのは、日本の統治下にあって、日本の影響を受けつつも、台湾人による自治を実現することでした。日本への同化策を批判し、台湾自治を唱える傾向は、文化協会の講演会で、たびたび主張されました。蔣渭水は、1925年８月29日、台北に設けられた読報社において「群衆運動の原理」と題された講演を行います。

「各人の個性、各民族の特性を発揮すると云ふこと、これが文化の中心となるのである。国家はこの基礎をもって治めて行かなければならぬ。人を治めるに強制した模型、すなわち同化によって人を治めることは不可能であり、取るべき策でない。自治政策でなければ各民族の個性を発揮し得ない。これが為には各民族に権利を与えねばならぬ」[15]。

このように、「同化によって人を治めることは不可能であり、取るべき策でない」と説かれます。文化協会を率いる蔣渭水にとって、「自治政策でなければ各民族の個性を発揮し得ない」ことは自明でした。以上みてきたように、台湾文化協会は、文化活動の促進を標榜しているものの、目指すところは、台湾の自治獲得でした。その中にあって、専務理事を務めた蔣渭水の役割は大きく、影響は甚大でした。彼が、「臨床講義」で唱えた「処方」を、台湾文化協会の諸活動を通して実践したことは見逃せないでしょう。台湾という「低能児」が「智識の栄養不良」を克服し、健康を取り戻す方法が模索されたのです。台湾文化協会は厳しい弾圧にあい、内部分裂もあって、蔣渭水は1927年に文化協会を脱退することになりますが、その時期になされた活動は貴重な役割を果たしたと言えます。

４．「臨床講義」が投げかけるもの――その今日的意義

その後も蔣渭水の有機体的台湾観は変わることなく、継続しました。1920年代の台湾は大変困難な状況にあり、蔣もまた台湾を「世界文化に於ける低能児」とまで呼びました。しかし、彼は台湾を見捨てたのではありません。むしろ彼は、文化運動や議会設置運動などによって、台湾が「文明国」になり、変わっていくことを信じ、自らそれを実践しました。なぜなら、台湾という有機体的身体が、社会的に成長すると考えたからです。この点で、蔣渭水の思想は、第一の国王中心の有機体的国家観、第二の健康な国家と「モンスター」の対立を説く社会観、第三の政治的・経済的成長を目指す社会観のうち、第三の類型に当たります。ただし、その主張が、統治者側でなく植民地側からなされたところに、大きな特色があります。蔣は、有機体的社会観を用いて、台湾を日本に同化されるのではなく、日本から自立する存在として植民地側から説明しました。そのことによって、下からの自治的な社会建設を目指すという点で有機体的社会観に新たな意味を付与したと言えます。

最後に、もう一点、蔣渭水の思想の今日的意義について触れましょう。彼の思想は、下からの社会建設だけではなく、グローバルな国際的な視野も持っていました。この点について彼は、文化協会設立の動機を回顧して、1925年８月26日の『台湾民報』で次のように述べています。「台湾人は、日中親善を媒介する使命を負っている。日中親善はアジア民族の連盟を前提とし、アジア民族の連盟は世界平和の前提でもある。世界平和は人類最大の願望である。それ故、台湾人は日中親善の媒体となり、アジア民族の連盟を促進し、人類最大の幸福である世界平和を導く使命をもつものである。簡潔に言えば、台湾人は世界平和の第一関門の鍵を握っている。これは、有意義で重要な使命ではなかろうか。我々は、重大な使命に目覚めて、それを遂行する必要がある。本会は、この使命を遂行できる人材を育成するために

[14] 伊藤潔『台湾』、113頁。
[15] 同上書、155頁。

設けられた。現在、台湾人は病んでいる。この病は治らない。治す人材もいない。当面は、この病根を治すところから着手しなければならない。台湾人が患っているのは、知識という栄養の欠乏症である。知識という栄養剤を飲まなければ、決して治らない。文化運動は、この病の唯一の根本療法である。文化協会は、これを専門に追究するとともに治療を行う機関である」[16]。

蔣渭水は、「台湾人は病んでいる」と考えます。けれども文化運動によって「知識という栄養の欠乏症」を克服し、根本的に治療することによって、本来の台湾人の使命、つまり「世界平和の第一関門の鍵を握っている」という使命を取り戻すことができます。1925年８月での彼の主張は、1921年11月の「臨床講義」と基本的に同じです。そこには、今日の台湾の困難な状況を見通したような思想を発見することができます。現在の台湾は、中国やアメリカ、日本といった大国の狭間にあって、とても困難でありながら、重要な役割を果たしています。百年前の蔣渭水の思想に立ち返ることは、その困難な状況を把握し、平和的なやり方でそれを克服する方法を示唆すると言っても過言ではありません。本日の集まりは、その意味でも大変貴重なものだと考えます。今後も皆さんと問題意識を共有できることを私は願っております。

[16] 蔣渭水「五個年中的我」『台湾民報』(1925年８月26日)、蔣朝根編『蔣渭水先生全集』、457-458頁。吉田荘人・前掲論文、49-50頁の邦訳を参考にしながら、中国語の原文から翻訳した。